アグナトール島での冒険

高坂　京介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アグナトール島での冒険

【Ｎコード】
Ｎ６５５７Ｘ

【作者名】
高坂　京介

【あらすじ】
ここはドラゴンしかいない島【アグナトール島】
ここで俺の壮絶な戦いが始まる
さらに仲間とも出会う冒険ストーリー

アグナトール島に行く前の話

俺はルーク、職業は戦士で１３歳だ！

負けず嫌いだがまだ、一体もモンスターを倒したことがない・・・

今俺がいるところはアグナトール島だ。

ここにはゲームで言う＜スライム＞という

ザコモンスターは一匹もいない。

なぜならここはドラゴンが大量にいてそいつ等がザコモンスターを

１匹残らず食べてしまったのだ！だからここのモンスターは

めちゃくちゃ強いのだ！

まあそんな俺がここに居る訳は２日前のことだ。

２日前――――――

俺：「あ～ヒマだな～」

俺はそう言いながら散歩をしていた　すると前から知らない男が来て

「あっ！ちょっと君！」

「ん？なんですか？」

「ちょっといまきみくらいの体型の人を探していたんだ！
ちょっと来てほしいんだけどいいかな？」

（まあヒマだから行ってみるか）

「あっはい　いいですよ」

「ありがとう！付いて来てくれないか？」

「分かりました」

そう言って俺は知らない男について行った

１０分後――――――

「着いたぞ！」

「ここは・・・港？」

そこは港で大きな船があった

「さあ、ここだ！乗ってもらうよ」

「あ・・・はい」

そう言って俺は疑問を感じながら船の中に入った。

入った瞬間男の人たちがたくさんいて中には

おれの身長の2倍くらいの大砲があった

（なんだろうこれ？何に使うんだろ～？）

すると俺を連れてきた男の人が俺の目の前まで来てこういった

「君、この大砲に入ってくれない？今どれだけとぶか実験してるんだ」

「は！？何でですか？何でこの大砲の中に入らなきゃいけないんですか？」

俺はきれた

「まあまあ落ち着いて　絶対飛ばないから。
僕たちがしても誰も1メートルくらいしか
飛ばなかったから」

（そうなんだ・・・なら大丈夫だな
この大砲も古そうだし・・・）

「分かりました・・・入ります」

「ありがとう！君がこの大砲に飛ばされる第1――――――――」

「なんか言いましたか？」

「い・・・いや
なんでもない」

男はあせっていたがまあほっといておれは大砲の中に入った

「よし！それじゃ引火させるぞ！」

そういって男の人達が大砲の向きを変えた

「引火、開始！」

そういって男の人が導火線に引火した

（今から飛ばされるんだ・・・
まあ飛ばないから大丈夫か・・・）

そう思っていると男がこう言ってきた

「言っておくがさっきの話は嘘だよ」

「エーーーーーー！！！！！！」

俺は驚いた　急いで出ようとしたが
もう遅かった

「いってらっしゃーい！！！」

男たち全員に言われ、俺は飛んで行った

「うっ・・・ここは・・・？」

俺は近くにあった看板を読んでみた

看板：『ようこそ！新人冒険者さん
ここはアグニール島です。
ザコモンスターはいないので注意してください
おるのはドラゴン系しかいません
1個エナジー武器がいつか
支給されるので頑張ってください』

「まじかよ！でもいつか武器が支給されることは・・・
めっちゃ逃げないといけないじゃねぇか！」

おれはそういって叫んだ

「まあこんな感じだ　くそっ
あいつらめ　帰ったらぼこぼこにしてやる！」

そう言っていると後ろから殺気がした

「ん？なんだ？」

人との遭遇・パーティー結成

「なんだ？」

俺は振り向いてみた　すると・・・

ドラゴンが５匹くらいいた

「うわっ　逃げるしかない」

俺はそう言って全力で逃げ出した

だがドラゴンたちも追ってきた

１０分後――――――

「はぁ・・・はぁ・・・ここまで来れば大丈夫だろう」

そう言った瞬間ドラゴンが１０匹くらい来て

俺を囲んできた

「くそっここまでか・・・」

そのとき、

「くらえ！おらおらおらぁ」

一人の男が俺の周りにいたドラゴンをけ散らせた

「だいじょうぶか？」

「あ・・・ありがとう・・・」

そう言って俺はその場に倒れた

「ん？ここは？」

「おっ！やっと気がついたか
ここは安全だ！ドラゴンは近づいてこないように
スプレーをかけておいた」

「ありがとう」

「それにしてもお前エナジー武器付けてないじゃないか？」

「えなじーぶき？俺まだ新人なんで・・・」

「ああ　そうか　お前来てから一週間経ってないのか・・・
これやるよ」

そういって大きい武器をくれた

「これ　お・・・重い・・・」

「大剣だから重いと思うけどなれたら楽だ」

「ありがとうございます
あの・・・あなたの名前は？」

「俺の名前はアビスだ！」
「俺はルークです」
「そうだおまえ初心者だよな」
「あ、そうですけど」
「なら俺たちの仲間にならねえか？」
「えっいいんですか？」
「嘘」
「えーーーーー！？」
「冗談だよ冗談」
「ふぅびびったー・・・」
「っていうことでようこそ」
「あさはかなり・・・」
「うわっ誰ですかこの人！？」
「おお！戻っていたかミーナ
今日は何匹倒したんだ？」
「５６５匹」

「えーーーーー！？
あのドラゴンをそんなに倒したの」

「双剣使いだからな」

「俺も頑張ってみるか・・・」

修行・実践

「うりゃあ！」

俺はそう言いながら剣を振っていた
アビスとミーナはねているようだ・・・

「はぁ・・・はぁ・・・大剣を振ってると
かなり疲れるな～　まあ『努力は決して裏切らない』
とアビスが言ってたからなぁ・・・
よし！頑張って後一万回は振るぞ
そうしてアビス達に迷惑をかけないようにしよう！」

６時間後――――――

「ん？もう朝か・・・」

そう言ってアビスは目をこすりながら海岸へ歩いた

「９９９８、９９９９、１００００！」

「おはよう！ルーク朝から素振りか？」

「いや　昨日からだよ」

「昨日からかあ・・・もう軽く振れるようになったか？」

「まだ少し慣れていないですがもう振っても疲れることはありません！」

「よし！なら次は実践だ！」

「実践かあ・・・分かった！」

「ならまず俺とミーナで１０匹おびき寄せるから
それを一気に倒せ！」

（えっ！？いきなり１０体って多くないか？）

「いまおまえ多いと思っただろう」

「えっ！？いや・・・ま、まったく思ってないぞ
１０体位余裕さ」

「わかった　よしなら行くぞミーナ！
１０体おびき寄せるぞ！

「わかった・・・」

そうしてアビスとミーナは森の中に入って行った

「休んでおくか」

５分後――――

「ふぅ・・・」

「・・・」

どうしたの？誰も来てないけど・・・」

「ルーク悪いが少し変更させる
ドラゴンの兄的存在の
ドボルを倒せ！」

「ドボルって誰だ？」

「来るぞ！やばかったら助けに行くからな」

ドスンッ

（来た！ていうか・・・）

「でかーーーー！？」

たぶん俺の４倍はあるだろう・・・

「くっやるしかないか・・・
うおおおおおおおおお！」

俺は走って勢いよくとび大きく切りかかった

「う・・・うそだろ！？」

ドラゴンの兄「ドボル」

「う・・・うそだろ！？」

俺は戸惑った　なぜなら大きく振りかぶって剣を振ったのに
相手の『ドボル』はよけていたのだ！

（初心者にこれはきつかったかな・・・）

アビスがそう思っているとルークが言った

「アビス！俺はまだまだ余裕だぜ！
昨日までの素振りで一つ分かったことがあったんだ！
だからこんなやつになんか負けやしない！」

「ぷっ　あっはっはっはっは！
面白い！分かったことを試してみるのだ！ルーク」

（よしっまずは集中・・・）

相手が手を大きくふってきた！

（今だ！）

俺は精神を一気に開放し最大のスピードで
『ドボル』の手をよけ顔面に向かって切りかかった！

『ドボル』もよけようとは思ったものの
早すぎてよけきれなかった

そしてドボルの角が一本取れた
そうなった瞬間『ドボル』は暴れだし
俺をぶん殴って逃げて行った
俺はその時こう思っていた
（ざまあみろ『ドボル』！今日は引き分けにしといてやるから
次あった時はボコボコにしてやるからな！）
俺はそう思いながら海へと落ちて行った
その時アビスがルークの剣を取りに行こうとしたら
光りだした！
（こ、これは！もうなったのか！第二形態へと！）
「ん？こ・・・ここは？」
「やっと起きたか2日も寝てたから心配したぞ！」
「俺って『ドボル』、倒したんだよな？」
「倒したっていうより引き分けって感じだ・・・」
ミーナが言った
「ふぅ～ん・・・まあいいか
次あった時はボコボコにしてやるからな～」

「それよりお前これを見ろ！
もうエナジー武器が第二形態になったぞ！」

「そういえばそれってエナジー武器っていう奴だったんか・・・」

「そういえばお前ってエナジー武器の説明知らないのか
なら教えてやるよ」

「うん！ありがとう」

「エナジー武器っていうのは強い敵を切れば切るほど
強くなっていくんだ！ちなみに俺たちも
第二形態だ！」

「何形態まであるの？」

「通常なら４形態までなんだが
ある一人の男が第４形態『改』までいったそうだ」

「へぇ～すごいな　その人
俺も頑張って強くなるぞ！」

「よし！ここで休みは終わりだ！
あいつでも倒しに行くかミーナ！」

「分かった・・・」

「えっ！？あいつって誰？」

「あっそうかお前は知らなかったな

なら仲間だから教えるぜ！
俺たちが倒す相手は・・・」

「倒す相手は？」

「レグニード、しゃべるドラゴンだ！」

「へぇ～何だか弱そうだね」

「なめるんじゃねぇぞこいつは今
千人ものハンターを食い殺してきたんだ
集中してなかったら殺されるぞ！」

「わ・・・わかった」

「よし！なら行くぞ！」

「お・・・お～」

俺はこのころから少し恐怖感を感じていた

ドラゴンの兄「ドボル」（後書き）

ここから3日間はがっこうの行事で書くことができません
土曜日からは毎日できれば1日1作ペースで
進めたいと思います

『レグニード』

「ふ～・・・」

俺は今、猛烈に疲れている

なぜなら今1時間も森の中を歩いているのだ・・・

「なぁ、アビス～。まだ着かないのか？
俺もう疲れてきたんだけど・・・」

「ん？ああ、もう10分ほどで着くぞ！
あと2つ忠告しておく」

「何？」

「まず1つ目は着いたら絶対に大声をだすな」

「2つ目は」

「2つ目は？」

「絶対に死ぬな」

「うん、わかった！」

そのような会話をしていると・・・

「ぎゃー！助けてくれ～！」

いきなり悲鳴が聞こえてきた！

「どうなったんだ！？」

その３０秒後に

「バキッ、ボキッ、ゴキッ、ガキッ」

ものすごい音が聞こえてきた！

「何があったんだよアビス！」

「わからない・・・だが、たぶんだが
人が喰われた・・・」

「！！！？？」

俺は一瞬喰われた人の事を想像したら
とてつもない恐怖感を感じた
走って行ってみるとそこには
もう血の跡しかなくて前方を見ると・・・

「こ・・・こいつが
レグニード！」

「こんな第一形態の剣を喰っても
腹の足しにもならんわい」

ほんまにしゃべっていた！

「ん？そこにおるのは・・・
あいつか！！！」
なんか俺を見て言ってきた
「なんだよ！」
「お前、生きておったのか！！！
ならこの前の勝負の続きじゃ！
今日こそお前を殺して喰ってやる！」
「あの～・・・人違いでは？」
「とぼけても無駄だ！
今日こそ殺してやる！」
レグニードは人違いをしているようだ・・・
だが、もう止められそうにない
「ルーク！俺たちも加戦するぞ！」
そう言ってアビスとミーナが加戦した
「俺はお前を倒して強くなる！」

『レグニード』（後書き）

投稿遅くてすみません。ちょっといろいろ事情があり、連載を休止していました。
でも今日からは最低でも1日1話は書こうと思います
【アグナトール島での冒険】をこれからもよろしくおねがいします

対決！『レグニード』

１０秒ほど静まりかえっていた・・・

最初に仕掛けたのは俺だった！

「ふぅ～・・・くらえ！」

俺は集中して最速のスピードで相手に切りかかった

「ふんっ！遅いわい！」

「何！」

「これでも喰らえ！いくぞ！ミーナ！」

「わかった・・・」

アビスとミーナがいっせいに攻撃をした

だが、これもよけられてしまった

「早いな・・・」

アビスがそうつぶやいた瞬間！

「喰らえ！わしの攻撃を！」

と言ってレグニードが大きく手をぶんまわしてきた

「うわっと・・・」
俺はかろうじてよけたもののアビスとミーナは空中にいたので
あたってしまった！
「ぐあっ！」
「くっ！」
「その喰らった瞬間が命取りじゃわい！
お前たちを喰わせてもらう！」
「ここまでか・・・」
「やはり私ではまだ実力が程遠かったのか・・・」
「あとは頼んだぞ・・・ルーク！」
アビスとミーナがそう叫んだ瞬間喰われてしまった
「う・・・うそだろ・・・」
「こんどは因縁のライバルである
お前を喰い殺してやる！」
そうレグニードがいった瞬間俺の剣が光った！
「くそ・・・俺はお前を絶対に倒す！」

俺は怒りに満ちていた

その時、剣の形が変わった！

「なんだ・・・！これは・・・」

「ほぅ・・・それは3形態目だな」

（なんだ？力がどんどんあふれてくる！）

「いくぞ！レグニード！」

「くらえ！これが俺の技だ！」

そう言って俺は加速しながらレグニードの方に向かった！

「いくぞ！龍牙撃滅！」

「そ・・・その技は！」

その『りゅうがげきめつ』という技が
レグニードの尻尾を切り裂いた！

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

レグニードは叫んだ

「なかなかやるのぉ・・・
だがあいつとは違うようだのぉ～」

「はぁ・・・はぁ・・・」

俺はかなり疲れていた

だが、レグニードはそこまで疲れていなかった

「ここからが本番じゃ！
覚悟せい！」

（うっ！やばい・・・このままだと
負けてしまう）

そう思っているとレグニードが腕を振いながらこう叫んできた

「くらえ！わが必殺！ラリアット～！」

（それ格闘技じゃねぇか・・・）

決着！『レグニード』戦

ただのラリアットだと思っていたらレグニードの腕から火が出てきた

「まじか！」

それを俺は剣で防いだものの木にぶつかった

「ぐっ！」

だが俺はすぐに立ち上がった

「おい！レグニード！」

「なんじゃ？」

「次の一撃を俺は全力で与える！
だからお前も本気の一撃を与えに来い！」

「わかったぞ！」

俺は行く途中にアビスにあることを教わっていた

「お前の剣が第3形態になったらこの技を使え！
名前は――――――」

（あの技を試してみるか・・・）

「うおおおおおおおお！

いくぞ！レグニード！」

「くらえ！龍黒魔斬！」

「これをくらって喰ってやる！
ドラゴンクラッシャー！」

たがいの一撃がぶつかり合い大爆発が起こった！

俺は立っていた、レグニードも立っていた
すると、レグニードが

「お前が使った2つの技、メタンというものも
使っていたぞ！あいつの強さは計り知れないからな
まあお前の勝ちだ」

そういってレグニードは倒れた

「メタンって・・・俺の兄貴だ・・・」

俺は少し戸惑った

だが俺はその場から立ち去りアビスとミーナの墓を作った
そして俺は礼とかをした後に号泣した
それで俺はこう思った

（俺は強くなる！強くなってメタンを倒す！）

そういって俺は森の中に入って行った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6557x/

アグナトール島での冒険

2011年11月5日02時04分発行